

聖書:エレミヤ書33章1～18節

説教:義の若枝を芽生えさせる

はじめに

今年の夏、休暇を利用して岩手の実家に行くことができ、五年ぶりに様子を見ることができました。親がまだ健在のときは結婚披露宴を開き、親戚や近所の人たちが集るほどの大きな家でしたが、今は誰も住んでいません。管理をしている兄は、あと数年以内には取り壊すと言っていました。そうなれば、屋敷の跡は雑草に埋もれて、ここに何があったのかさえわからなくなっていくでしょう。

今日の箇所には、「人も家畜もいない廃墟となった町に羊飼いたちの住まいが再びできる」とあります。どんどん少子高齢化社会が進む日本では、私の実家のように一度取り壊されたらそこに再び新しい家が建つことはほとんど考えられませんが、ましてユダ王国はどうでしょうか。神に逆らい続け、エレミヤが語る主のことばに耳を傾けようとせず、悔い改めなかったのです。その結果、バビロンに攻められて滅んでいきます。神の厳しいさばきが下されて滅んでしまった町が、どうして再び建て直されるのか。そんなことはありえないはず。ところが、「羊飼いたちの住まいが再びできる」と書いてある。これはどういうことか。ここにどのような恵みがあるのかを見てまいります。

1 エレミヤ

1) エルサレム陥落の直前 (BC.587頃)

1節に「エレミヤがまだ監視の庭に監禁されていたとき」とあります。ひとつ前の32章の所に、エレミヤが監禁されたのは南王国ユダの最後の王であるゼデキヤの第十年のことだと書いてあります。年代としてはBC.587年頃のことです。エルサレムが陥落してゼデキヤ王が補囚となってバビロンに連れて行かれる一つ前の年になります。その頃はすでに、バビロンの軍隊がエルサレムは周りを取り囲んでいるけれどすぐに攻めてくるわけではない。いわゆる持久戦になっている。エルサレムは門を堅く閉ざして籠城し、蓄えてある食料でなんとか持ちこたえている状態です。そんなときにエレミヤは牢に入れられ監禁されていました。

2) 監視の庭に閉じ込められていた (37章)

ところでエレミヤはどうして監視の庭に監禁されていたのか。この辺りの詳しいことは37章に書か

れています。時間が少しさかのぼります。ゼデキヤの一つ前の王であったエコンヤが補囚となってバビロンに連れて行かれ後のことです。年代で言えばBC.597年からまた数年経ったときのこと。エルサレムはそのときもバビロン軍に包囲されていたのですが、エジプトの軍隊が南からやって来るといううわさが立ち、それを聞いたバビロンは軍隊を引き揚げていなくなってしまった。これを見たエルサレムの人々は当然ですが喜ぶ。そしてこう言った。「自分たちは助かった。もうバビロンはやって来ない。」このように言いたくなる気持ちは分かります。それに対してエレミヤはこう言った。

「カルデア人 (バビロン) が引き返して来て、この都を攻め取り、これを火で焼く。」みんなが思っていることと正反対のことを言いだしたわけです。そうしたらどうなったか。イスラエルにも日本と同じように同調圧力というものがあった。町や村のリーダーが腹を立て「エレミヤはマイナスなことばかり言って、国民の士気をくじいている。彼をひどい目に遭わせろ」と騒ぎ出す。それでエレミヤはとらえられて井戸に入れられてしまう。井戸の底には水はないのですが泥になっていて、エレミヤがつり降ろされたら体が泥の中に沈んでしまったと書いてある。これは耐えがたい拷問です。役人のひとりがそれを見て、さすがにかわいそうに思ったのでしょうか。ゼデキヤ王の許しをもらって、エレミヤは穴からつり上げられて助かるのですが、そのまま釈放とはならない。エレミヤに腹を立てた人たちの意向を無視できないからです。それでゼデキヤはエレミヤを監視の庭に監禁したということなのです。そんな目に遭いながらも、とにかくエレミヤは主の厳しいさばきのことばを語らなければならなかった。預言者はいのちがけでした。

2 理解を超えた大いなること

1) さばき (5節)

ではすべてが厳しいさばきのことばであったのか。確かに5節はそうです。「彼らはカルデア人と戦おうとして出て行くが、わたしの怒りと憤りによって打ち殺された屍をその家々に満たす。それは、彼らのすべての悪のゆえに、わたしがこの都から顔を隠したからだ。」

カルデア人とはバビロンのことです。神がユダ王国の味方をしないので、あなたがたはバビロン軍

には絶対に勝てない。なぜなら、エレミヤのことばを聞かず、主に逆らい続けたから。これはまさに主の厳しいさばきのことばです。

2) 赦しと回復 (6節)

ところがこの後に続く6節から8節はどうでしょう。「見よ。わたしはこの都に回復と癒やしを与え、彼らを癒やす。そして彼らに平安と真実を豊かに示す。わたしはユダとイスラエルを回復させ、以前のように彼らを建て直す。わたしは、彼らがわたしに犯したすべての咎から彼らをきよめ、彼らがわたしに犯し、わたしに背いたすべての咎を赦す。」

5節は厳しいさばきのことばだったのに、6節になると突然赦しのことばに変わります。言っていることがまったく反対です。そうしたら誰もが疑問に思う。なぜ言っていることが極端に変わるのか。普通ならば5節と6節の間に説明があるべきです。ところがなにも説明がない。それで戸惑ってしまう。これをどのように考えたらよいのでしょうか。

3) 悔い改めたのか?

前回の話はこういう内容でした。主に逆らい続ける者へは厳しいさばきが下される。しかし、もし人が罪を自覚して神に立ち返るなら神は思い直される方なので、ただちに赦して下さる。そのような内容です。そうしますと、5節の厳しいさばきを語りながら、6節で赦しと回復が与えられるのには、どこかで「立ち返る」ということがあったからということになる。5節と6節の間にその説明を入れてみましょう。「私がこの都から顔を隠したからだ。しかし、あなたがたは主に立ち返ったので、見よ。わたしはこの都に回復と癒しを与える。」こんなふう言い直すと、すべてがうまくつながって説明できます。しかし、「主に立ち返った」という話しはどこにも出てこないように見える。ないものを無理矢理に付け加えるわけにはいきません。もしかしてエレミヤは、自由になりたいと思って、主が語らなかつたのに、人々が喜んで聞いてくれるようなことばを勝手に語ったのか。まさかそんなはずはありません。いったい理解を超えた大いなることとは何のことなのでしょう。

3 十字架

1) いつくしみの約束

ヒントは14節から16節です。「見よ、その時代が来る——主のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家とユダの家に語ったいつくしみの

約束を果たす。その日、その時、わたしはダビデのために義の若枝を芽生えさせる。彼はこの地に公正と義を行う。その日、ユダは救われ、エルサレムは安らかに住み、こうしてこの都は『主は私たちの義』と名づけられる。」

14節に「わたしはイスラエルの家とユダの家に語ったいつくしみの約束を果たす」とあります。いつくしみの約束とは何かということ、ずっとたどっていくと17節に突き当たります。「ダビデには、イスラエルを王座に就く者が断たれることはない。」これが、かつて主が約束してくださったことの内容です。いったいいつそんな約束をしていたか。第一列王記2章4節です。ダビデの死ぬ日が近づいたとき、ダビデは主のことばをソロモンに語った。「もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、いのちを尽くして、誠実にわたしの前を歩むなら、あなたにはイスラエルの王座から人が断たれることはない。」

ダビデの家系から出てこの地に公正と義を行う。やがて来られる救い主キリストを指しています。

2) 義の若枝

それだけではありません。エレミヤはもう一つ語っている。15節、「その日、その時、私はダビデのために義の若枝を芽生えさせる。」若枝ということばで思い出すのはイザヤ書11章1節です。

「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」エッサイはダビデの父親の名前で、この箇所はダビデの家系からやがて救い主が来られることを表していると言われています。

今二つのことを言いました。若枝が出て実を結ぶ。イスラエルの家の王座に着く者が断たれることはない。いずれも、やがて来られる救い主キリストを指しています。

今日の箇所の大きな疑問、5節の厳しいさばきのことばのすぐ後で6節以降に赦しと回復という正反対の話が出てくる。さばきから赦しへ変えられるためには、必ず立ち返るということが必要なはずなのに、どこにも出てこない。どういうことかわからない。そういう疑問でした。答えはこれです。5節から6節の間にはキリストの十字架があるので。この方が私が立ち返る前に、先頭に立って立ち返ってくださった。だから私たちは十字架を見て、後でもいいから、遅すぎるといっていいから、いつでもいいから、とにかく立ち返りなさい。あなたは赦されるのだから。エレミヤは語った。

3) 永遠の回復

ただ一人の人の罪が赦された、で終わりません。大きな変化が周りに起きていく。10節後半から11節の始め。「荒れすたれたユダの町々とエルサレムの通りで、楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、主の宮に感謝のいけにえを携えて来る人たちの声が、再び聞かれるようになる。」

人が建てたものは、私の実家のようにいつかは朽ち果てていきます。しかし主は再び建ててくださるものはそうではない。永遠に続きます。なぜ永遠に続くと分かるのか。18節後半。「いけにえを献げる者が、いつまでも絶えることはない。」なぜ絶えることがないのか。だれが献げ続けるのか。イエス・キリストが十字架において、完全にご自分のからだをいけにえとして献げてくださり、焼いて煙にしてくださった。人間の献げるささげ物は不完全ですから何度も献げなければならない。しかし十字架で献げられた主のみからだは完全なささげ物でしたから、永遠に絶えることがない。

罪が赦されることが何か大きな影響を与えるのか。そんなことはありえないと思っていたかもしれない。そうではない。荒れ廃れたところに主が再び建ててくださる。それもう朽ち果てることはない。花婿の声と花嫁の声。その宴の歌声を私たちはもう一度聞くことになる。罪が赦された者の先には、そのような未来が待っているのだということです。その日を待ち望みながらまた歩んでまいります。